



池田幸弘 教授

専門:経済学史・経済思想史

(インタビュアー:本橋)

『経済理論をさかのぼって考える』

Q. 池田先生の専門とされている研究内容はなんですか？

私は経済学史・経済思想史を研究、及び指導しています。日吉設置科目の経済思想の歴史を受講している2年生の皆さんには馴染みがあるかもしれません。経済学の成立はおよそアダム・スミス(1723-1790)以来、たかだか200年程度と様々な学問分野の中では比較的若い学問です。とはいえ、この200年という時間の中に学者も沢山出てきては消えて行きました。いま代表されている経済学を学べば十分なのではないか?と思う方もいらっしゃると思いますが、私はいまある経済理論や政策をさかのぼって考えることもそれとならんで大変重要だと考えています。

専門に研究していることはカール・メンガー(1840-1921)を中心としたミクロ経済学の成立について研究を行っています。メンガーはオーストリア学派の創始者で、その系譜上に、現在の研究会の題材にもなっているフリードリヒ・ハイエク(1899-1992)等がいます。

『納得がいくまで勉強をしていますか?』

Q. 池田先生の教育理念を教えてください

大学教員は研究者と教授職という2つの側面があります。このバランスはとも難しく、先生によっては前者の側面が強い人や後者の側面が強い人、どちらもいると思います。私自身は両者のバランスが取れていてかつ、熱心にやるということを中心に心がけています。

今の学生は総じて真面目な人が多いと思います。授業1つとっても私の学生時代に比べて出席率も高いと思います。その一方で、自分自身で納得のいく勉

強をしているのかという点においては心配しています。卒業するまでに、自分で調べて納得のいくまで勉強したといえる講義や科目を作ることが大切です。

学生の多くは評点というものを気にしながら勉強していると思います。もちろん評点は責任を持ってつけていますが、先生たちにとっては達成度を記しているに過ぎず、余り固執してはいけないと考えています。それよりも大切なのは1つ1つの講義を実質的に身につけているかどうかです。例えば、講義の中で出た参考文献を読んでみることや、担当教員に質問をしてみることもきっかけとなるとおもいます。皆さんにとって、経済学部の講義科目は多くが大教室で行われており教員との距離を感じているかもしれません。教員の多くもその様に感じているので、講義後やオフィスアワーを利用して、ぜひ疑問をぶつけてみてください。

『研究者の道を志した本との出会い』

Q. 池田先生の学生時代のお話を聞かせてください

なぜ研究者の道を目指そうと思ったかと言えば、大学2年生の終わりに出会ったメンターの『国民経済学原理』の影響が大きいと思います。また、私は経済理論よりも経済思想史の方が好きでした。人というものは多様であり、経済という人間の営みに対して様々なアプローチができる経済思想史はとても魅力的だったのです。この流れから、ゼミは経済思想史系のゼミに入りました。

私は、中学生の時から慶應で、大学院もずっと慶應でした。学生時代からこのかた、ほとんどを三田で過ごしているなのでこの街の印象を少しお話しします。印象として飲食店の入れ替えが激しいなと思います。あれ、この前このテナントはなんだったかな…と思うお店が多いです。今でも残っているお店の中ではやはり二郎(ラーメン二郎三田本店)がすぐに思い浮かびます。その昔は食券もなかったのでオヤジさんの記憶力はすごかったですね。

なぜ大学院にしたか、あるいは研究職に就こうかと思ったかといえば父親の影響があったと思います。父親はビジネスマンでいつも忙しそうにしていました。それに比べれば研究職って余裕があるのかな…と思っていたのですがいざ研究職に就けばそのような事はなかったですね(笑)

確かに例えば、いまから2時間何も仕事をしないということができるとい

点では自由かもしれませんが。研究職は裁量労働制で、拘束される時間は講義やゼミと、組織運営のための会議などです。しかしながら、1年や2年、あるいは5年10年という長期のタイムスパンでは研究成果を出さなければならず、毎日の過ごし方もその目標に沿って動いていきます。その点において余裕はあるようでないのです。

『読書経験と何かに熱中してきた学生』

Q 池田ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

私の研究会では、読書量をある程度要求しています。理論経済学や計量経済学、経済政策等々経済学部の研究会は他分野ですが、そのどれもが一定の読書量を必要とすることは間違いありません。しかし、その中でも経済思想史という分野はより著作から学ぶことが多い分野ですので、読書経験がないと研究会での活動は難しいでしょう。読む本のジャンルは経済学や社会学、法学、文学など何でもよく、問いません。

また、日吉のこの授業がこういう形でよかった、印象に残った、ということもまとめておいて欲しいと思います。他にも課外活動で頑張ったことについても説明できるようにしておいてもらいたいと考えています。一見すると課外活動と研究会活動は関係ないのではないか、と思うかもしれませんが、相関関係はあるのではといつも感じています。何か1つの物事が頑張れる人は他の物事に取り組む時でもハイパフォーマンスを発揮できるのだと思います。

『大学生活という貴重な時間を漠然と過ごさない』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

大学1、2年生という2年間は短いということを意識して欲しいですね。三田での2年間は主として研究会活動・卒論執筆だけではなく、就職活動に時間を取られてしまいます。その様に考えると日吉での生活は重要性を帯びてきます。私も日吉での学生時代を経たから言えることですが、日吉での2年間というのは茫漠とした時間に感じられるものです。しかし、そこで漠然と過ごしてしまってはダメで、学業、語学、資格、部活等何でもいいので1つ熱中してみてください。それに加えて、せっかく慶應で勉強しているのですからいくつかの講義については、自分で納得できるまでとことん取り組んでみてください。

最後に20代の特質をお話致します。20代というのは瞬発力に長けた年代

だと言えます、これは身体能力に限ったことではありません。創造的破壊ができるという点で20代は瞬発力を有しているといえるでしょう。入力と出力の関連性を表す関数を例にとってみると、20代は $f(x)$ という関数(今までのあなた)を $g(x)$ という関数(新しいあなた)に変えることができます。今は想像しづらいと思いますが、30代を越えると自分の考え方やモノの見方等を研ぎ澄ますことこそできますが、根本的に変えることはとても難しくなってしまうのです。年齢を重ねていくと色々な能力が失われたり、身に付けづらくなってしまいます

それを意識すると、20代という今、漠然と毎日を過ごさないことの大切さがわかるかと思います。そのための1つの方法として読書は非常に大切なことだと思います。ぜひ、大学生活が有意義なものであるように、1日1日を大切に過ごしてください。